

## 烙印と逸脱の社会学

中 村 正

一 逸脱現象は社会の秩序があるかぎり、どんな時代や文化にもみいだされる。逸脱現象をみれば、その社会の共同性や文化の様態が理解できる。このような現象をとらえるため、社会学においては「レイベリング・セオリー(以下、烙印理論と言ふ)」がその視座構造のユニークさゆえに独自の位置を占める。烙印理論において問題とされるのは、病理視される側ではなく、特定の現象を病理視する側なのである。つまり、病理視される異常のなかを生きる人々に内在した問題が逸脱ではなく、共同の意味空間を共有する他者の反作用、すなわち烙印の効果をもって逸脱が生じると言うのである。ゆえに、烙印こそが逸脱を説明し、意味づける独立変数になるのである。はじめに逸脱があって烙印が發動されるのではなく、特定の行為に烙印をおすことが逸脱をつくりだすのである。

このような理論であつてみれば、実証科学を標榜する社会学内部からは、当然数々の批判を引き起こす。たとえば、逸脱者の初めの行為は彼自身のオリジナルな行為ではないのか、はじめに逸脱行為があるから効果的に烙印が付与されるのではないのか、同じ状況にあつてもすべての人が逸脱的になるわけではない、などと。総じて「逸脱原因論不在の烙印理論」という批判である。こういう批判を受けて、烙印理論は紆余曲折を繰り返す。批判に応えようとして、自己の見地を社会学方法論の内部へ禁欲的に精

密化すればするほど、烙印理論としてのダイナミズムは失われていく。烙印付与と逸脱現象のかかわりを考察することのもつ広大な社会学的意味が、科学の実証性要請のまゝに色あせていく。

かかる現状に鑑みて必要なことは、逸脱と烙印の関連を、どちらが独立変数なのかと分析的実証主義的に問うことではなく、逸脱と烙印の問題連関性それ自体の生成する意味空間の中心にあるものをとりだすことだと考える。

二 逸脱生成において烙印の果たす役割の重大性を巧みに表現したのは、「われわれはそれを犯罪だから非難するのではなくて、われわれがそれを非難するから犯罪なのである」というデュルケームの主張である。逸脱を生じさせるのは「われわれ」の作用、つまり人格化された集合表象なのである。逸脱とはひとえに「われわれ関係」に由来する。逸脱であることの規準は、当該行為に内在する何らかの特質ではなく、それを逸脱と認定する「われわれ関係」のなかにある。ゆえに、「われわれ関係」の様態によって、何を逸脱として認めるのかは変化する。デュルケーム社会学における逸脱と烙印の相互関連を要約してみると以下のようなことになる。第一に、悪の烙印は「聖なるもの」への汚染から発生すること、第二に、近代社会において、烙印は聖なる人間性への汚染として構成されていること、第三に、刑罰の緩和過程は逸脱者の主体的改俊をとおした人間性の回復を目的にしていること、第四に、しかし、その聖性回復過程は二律背反性を帯びたものであること、である。デュルケームにとって、烙印と逸脱の関係は、どちらが独立変数であるのかという昨今の逸脱社会学にみられるような狭い問題構成のなかにあるのではなく、近代社会の存立構成上の問題として定立されていることが理解できる。こうしてデュ

ルケームは「聖なるもの」論によりながら逸脱と烙印の関連性を説いたのである。

三 聖なる個人の時代が抱えた自己矛盾の病理現象である私化現象、ナルシズム、アノミー、エゴイズム（これらは総称して功利主義的個人主義と特徴づけることができる）から、聖性に輝く個人を救済するためにデュルケームが達した見地は、道徳的個人主義の形成というすぐれて理念的なるものの領野であった。しかし、現実はどうであらうか。刑罰の緩和化過程を経て、デュルケームの言う道徳的個人主義は実現されたのであろうか。デュルケームの言う「聖なる個人」の自己矛盾が、不幸にして全面開花しているのが現実ではないのか。「聖なる個人」は解決しえないジレンマを抱え込んでしまったのが現実ではないのか。これらの問題が次に検討されねばならない。なぜならば、近代の烙印と逸脱の関連はこの「聖なる個人」のジレンマを問うことにほかならないのだから、道徳的個人主義という外在的な参照点を尺度にするのでなく、このジレンマを烙印と逸脱の関連性のうちに内在的にとらえることが課題となるからである。これらの問題を、デュルケームのような道徳的個人主義という理念的範型をもちだすことなく、逸脱と烙印の新たな内在的関係として定式化し直したのが、フーコーである。フーコーは言う。「われわれ関係」は多くの人が営む生活類型と社会の設定する人間類型に社会の構成員を適合させ、それらの類型からズレることに逸脱性を付与するのである、と。この過程において、量的な意味での多数か少数かとい

う事。実。的。類。型。が、ノルムをとおして、質的な意味での正常か異常かという規。範。的。類。型。に置換されるのである。こうしてノルムは、人間を「文明」と「野性」にふりわけける。フーコーは、逸脱と正常性、理性と狂気、病と健康、野性と文化、自然な性関係を正ての異常性欲など相互に反転しあったものの密接な関係性を明らかにだす。逸脱現象をみる場合、重要なことは逸脱していない者の存在であり、彼らによって、ある行為を逸脱的であると認定される共有された意味空間の優越性なのである。共同の意味空間が先行して存在しなければ、ある行為を逸脱とする烙印付与現象は成立しないのである。傷つけられては困るものがあるからこそ、烙印を創出して社会はそれを防衛するのである。要するに、逸脱的行為が先行して烙印が発動されるのでない。逸脱的行為は烙印付与の機会を提供するだけである。ここまではデュルケームと同じである。しかし問題なのは、正常なる人々にたいして逸脱性・非行性の意味を放射する「影を裁くものとしての烙印」の威力なのである。デュルケームの「聖なるもの」論に基礎づけられた烙印理論はフーコーをとおしてその道徳的個人主義という異質物を濾過された。こうして、フーコーはデュルケーム以上にデュルケーム的な烙印理論を徹底し、展開したのである。

\* 詳細は、拙稿「烙印と逸脱の社会学—デュルケームとフーコー—」（『哲学論集』第三五号、大谷大学哲学会、一九八九年三月）を参照されたい。